

はじめての集団経験の意義

小林 治 夫



子どもがはじめて集団に加わるというのは一体いつ頃だろうか。この経験は子どもにどんな反応を喚起させ、どんな影響をもつだろうか。そしてもしこの経験がはじめてであるゆえに、子どもに何らかの不安を生じさせ、そのために集団への適応に困難なことがあるとすれば、保育者はそのとき子どもに対してどんな処置をとったらよいか。以上のようなことがここで述べようとする主題になろうかと思えます。

(一)

ところではじめての集団経験といいますが、ここでいう集団とはどんなものを指しているかを考えておかなければなりません。

おそらく、子どもがはじめて経験する集団というのは、幼稚園・保育所などの子どものグループを指すのが常識であると思われれます。実際、子どもを幼稚園へ入れる理由を母親に尋ねてみると、子どもに集団生活をさせたいから、あるいはさせる必要がある

からという答えが圧倒的に多いのです。しかし集団生活そのものにはなにも幼稚園や保育園にあがってから始めて経験するわけではないことも一般の人たちはよく知っています。

たとえば、子どもは誕生とともに集団の中で生活しているということができます。実際、子どもは父親・母親に見守られながら、その人たちの影響を受け、かつその人たちに何らかの働きかけをしながら生活をしています。しかしこのような家族は集団とはいえないと思われるかも知れませんが、子どもは一人で生活できるわけではないので、りっぱに集団と名づけることのできる性格のものです。

このような家族関係における集団はともかくとして、子どもが二、三才を過ぎる頃ともなれば、自然に近隣のおなじくらしい年齢の子どもたちを相手にあそびを始めるようになり、事情が許せばこのグループはある程度の大きさに発展して行き、これもまた

りっぱに子どもの集団経験ということができません。

こう見てくると、はじめての集団経験を幼稚園・保育園などの入園の機会ということにするにしても、もっと「集団」ということを規定しておかなければならないことがわかります。実際、上にあげたような親、きょうだいの家族集団、近隣の子どもたちのあそび集団、幼稚園・保育園の教育集団などは、いずれも集団と呼ぶことができません、それぞれ違った性格をそなえています。

家族や近隣の子どもたち同士の集団は、ふつう互いに親密な関係にあり、いわゆる対面的結合関係であるということができませんが、幼稚園や保育園の集団は入園のあかつきには次第に対面的結合関係へと発展していく可能性をもつてはいますが、入園当初は未知の教師や子どもたちの偶然の集まりであるといえます。したがって、前者はいわゆる一次的集団、後者は二次的集団と呼ばれる性質のものと考えられます。結局、はじめての集団経験ということが問題になるのは、比較的間接的な、互いにある程度の距離をもった二次的集団へ、子どもをなかなば強制的に入れなければならないというところに生ずるのだと思います。

(二)

二、三年まえ、東京都内の八つの幼稚園の新入園児を担当する先生にお願いして、つぎのような項目について、入園式の日から十日間の幼稚園での子どもたちの行動を観察してもらったことがあります。すなわち、イ、いやがって園に来ない、ロ、園に来ても付

添人から離れない、ハ、付添人から離れるのをいやがる、ニ、先生にまつわりついて離れるのをいやがる、ホ、すみっこに立って遊びに加わろうとしない、ヘ、ひとりあそびしかできないなどがあります。この観察についての記録は園児が帰ってから、教師がその日の保育の状況を回想して行なうものだったから、かならずしも正確なものとはいえませんが、その結果は、被調査児の約四五%の子どもが十日の間に、一回ないしそれ以上、右の項目の該当者となっていることがわかりました。また、この調査の際に、母親に、子どもが朝幼稚園へ出掛けるときの様子を聞いてみました。が、かならずしも幼稚園での評価と一致しない子どももいました。すなわち、家では喜んで幼稚園に行つたつもりでも、園ではきわめて消極的な行動を行なっていた子どももいたし、反対に、いやいや家を出る子どもでも、園ではその片鱗すら見せないという子どももいました。

この子どもたちはその後どのように変化したか、興味あることですが、一学期の終わる頃もう一度園をたずね、子どもたちの適応状況を伺ってみましたところが、ほとんどの子どもは、入園当初に見られた例の反応は影をひそめ、わずかのものにまだその名残りをとどめていました。このような幼稚園入園当初に見られる反応は、一種の不安反応と考えることができると思います。そしてこの不安反応は多かれ少なかれすべての幼児のはじめての集団経験にともなうものでありましようが、それが特に強く表われる

ものとするのではないものがあるでしょう。そして強く表われたものが、園に来て母親から離れるのを嫌がる等々の反応とならないでしょうか。

(三)

ところでこのような強い不安反応はどこからもたらされるのでしょうか。これはおそらく、それまでの集団経験、つまり家族、とくに親子関係および近隣のあそび友だちなどの一次的集団経験と関係があると考えるのです。

親子との関係では、なかならず両者の信頼関係が大切です。ところでこの信頼関係はいつごろできるでしょうか。エリクソンによりますと「他人に対する信頼と愛情、不信と敵意などは零才台の人との関係に根ざしている」ということであります。あの生理的生活に始終するように見られる乳児期の子どもたちのどこに、信・不信・愛情・敵意などの人間生活の基底となるような感情が芽生えるのかと思われるのですが、そのことはまたつぎのエリクソン引用の中で明らかにされるでしょう。「幼児期の最初に経験したことから得られる信頼の念の分量はあたえられた食物や表現された愛情などの絶対量とは関係なく、むしろ母親との関係の質によるらしい……母親というものは、赤ん坊の個別的な必要を敏感に満たしてやり、またかれらの文北の枠内で信頼されているライフ・サイクルの中で、これは信頼しても大丈夫だという個人的な観念を確立させてやるような具合に赤ん坊を取り扱うものであ

る。こうして赤ん坊に信頼の念を起こさせる」

結局、母親と赤ん坊のあいだに徐々にかもし出されて行く信頼の関係は、ただ単に母親が子どもに何かを十分に満たすということから生まれるのではなく、むしろ子どもの生活リズムの思いやりある理解から湧いてくるというわけです。赤ん坊は二、三ヶ月の頃に母親を認めるようになるが、このことは赤ん坊が信頼されているライフ・サイクルの中で、これは信頼しても大丈夫という信念の芽ぶきと考えることができるでしょう。そしてこの信頼の芽は、やがて父親へ汎化し、さらに人見知りという現象を通して他人へと拡散して行くのではないかと思われまます。

子どもが歩行が可能になり、はなしことばがおいおい出来上がる頃になると、近隣の同じ年頃の子どもたちとあそび始めます。おそらく最初は相互理解の片鱗すら持ち合わせぬ、むしろ我欲の権化のような子どもたち同士は、ただあそびという共通の利害のもとで結びつき、そうして子どもは親の信頼の懐に守られながら、あるときは勇気をふるい他の子どもにけんかをいどみ、あるときは相手を理解してその要求を容れるという繰り返しから、子どもの中に相互理解の能力がつかわれて行くでしょう。親とのあいだにつくられた信頼の関係は、子ども同士の友情を確立する上に大きな力となっているはずで、こうして子どもは二、三才の頃に身近なあそび友だちを積極的につつようになります。けれども、子どもはこの近隣のあそび友だちとは、あそびたくなけ

ればあそばなくてもよい間柄です。しかしこの近隣のあそび友だちとの交わりが、つぎの、ある種のモラルに支えられて成立する集団（二次的集団）の経験にかかりをもつてくることはいうまでもありません。

(四)

入園直後に母親から離れないなどの一種の問題行動を行なう子どもたちには、二つの違った型があるように思われます。その一つは、母親と子どものあいだの信頼関係が確立されていないか、あるいはそのような関係が確立されてはいたけれども、他のきょうだいの出現でそれにひびが入っているような場合、他の一つは、このようなことは無関係に、二、三才の頃にあそび友だちとの交わりの経験を持っていなかったような子どもの場合です。両者の現象が同じであるために、しばしば同じような扱いを受けてしまいがちですが、この点よく考えておく必要があります。

いつかある新聞の投書につきのような問題が提起されたことがあります。実はひとりっ子なのだが、幼稚園に入ることにになり入園式に連れて行ってみると子どもは非常に不安がって、つぎの日からの登園を嫌うようになった。母親はこのとき心を鬼にして、他の仲間が幼稚園から帰る頃まで、部屋に正座させたところ、つぎの日から通園するようになり、今も喜んで通っているというのです。これに対してその処置にはまったく同感、愛情はここのように厳しいものであるという賛意を示した投書とともに、と

んでもない、うちの長女はむしろやさしくかばってあげたら、つぎの日から幼稚園に行くようになった、愛情を誤解しないようにという反論もありました。

ところが、この両者の例を考えてみますと、正座の子はひとりっ子、やさしくかばわれた子どもは長子ということで、ひとりっ子の場合には、わたくしの想像によりますと、母親との信頼関係は充分できていても、友だちあそびの点で欠けたところがあつたのに違いないと思われるし、また長子の場合には弟妹の存在のために、母親と本人のあいだに關係が確立されにくい状況にあります。従つてこの二人の母親の、子どもに対する処置は違つてはいますが、この違いは単に親の性格やしつけに対する認識、好みなどの相違に基づくのではなく、むしろ登園を嫌っている現実の子どもの、それぞれの異なった原因に対して、適切な扱いをしたまでのことのように思われます。すなわち母・子のあいだの關係に何らかの障害がある場合には、その障害を取り去つて、關係をもう一度立て直す処置が必要だし、子ども同士のあそびに不慣れの場合には、友だちあそびに徐々に慣れさせることが大切になります。

以上、わたくしは、いわゆる子どもたちのはじめての集団経験によつて惹起される問題から、親と子の關係、近隣のあそび友だちとの關係の重要性を指摘したつもりです。しかし、これらはすべておそらく仮説であり、いずれは臨牀的、実験的証明を必要とするものであります。

(長野短期大学)